

『仏教学への道しるべ』

大谷大学仏教学会編

本書は、仏教の学的研究に志す学生諸氏のために本学のゼミ担当のスタッフ十六名が書き下したもので、仏教学セミナー三十号の刑行を記念して成ったものである。セミナー第一号の発刊は今を溯ること十五年の昭和四十年であり、以来第二十七号まで「道しるべ」が書き綴られた。学の内外を問わぬ多数の読者から好評を得たこの「道しるべ」に各執筆者が加筆・増補し、さらに第一編第五章「大乘経典」と第四編「日本仏教研究文献要覧」とを新たに加えて一書としたものが本書なのである。近來仏教学は目覚しく進歩し変貌を遂げているが、いざ初心の者がこれを学ばんとするとき指針を失いがちである。単に断片的な知識を提供するにとどまらず、今日までの仏教学の歩みを踏まえ如何なる研究が今後に課せられているか。それを各担当者が豊富なエピソードを盛り込んで手引する。以下に本書の内容を概観することとする。

第一編「インド仏教研究への道しるべ」は、「原始仏教」(第一章)から「チベット文献」(第九章)までの九章二百余頁に互って、各分野における研究の意義と方法、及び、それに伴う必要な文献資料が適宜に解説される。インド仏教の展開過程に順じて「原始仏教」・「戒律仏教」・「アビダルマ仏教」・「大乘経典」・「中観仏教」・「唯識仏教」の道標を立て、「インド仏教史」(第八章)と「チベット文献」(第九章)についての紹介もある。史的研究

や言語学的研究など多彩な側面をもちつつ仏教学を研究することの大切さが窮える。またインド仏教の研究は各国の研究者間の学术交流がとくに盛んであり、初学者といえども外国の仏教学界と出版文献についての知識が不可欠の要素となる。本篇を通じて外国の主な文献が幅広く取り上げられ、中でも「原始仏教」については外国の文苑に關して独立した一章(第二章)が設けられている。

第二編「中国仏教研究への道しるべ」は、四章七十余頁から成り、研究課題の設定方法と研究に臨む基本的態度及び基礎的文献の紹介が懇切になされている。中国仏教といえば経論の注釈の学と考えられがちであるが、一番もとになる経論を読まずしていきなり中国の著作を研究しようとすることは無意味であることを指摘している。また本編には「学会誌と論文集」(第四章)についての説明があつて先学の歩みの輪郭が把握できて有益である。

第三編「インド学研究への道しるべ」は、「インド学散策」と題し、まずその広汎な学問分野の全体像が整理把握せられる。仏教を仏教の内において把握するだけでなくインド思想の上でより明確に把握することが必要であるという。両者の相互関係のうえに成り立つがゆえに「道しるべ」としてインド学が重要な位置を占めるのであり、本編にその素描が掲げられている。

最後に第四編「日本仏教文献要覧」は、日本仏教を学ぶ人に文献の概略を知らせんがために編んだ文献目録である。日本仏教の性格上、各宗派別の配列であるが、加うるに修験道や往生伝及び仏教文学についての資料も網羅されているのである。

(B6版・三七〇頁・文栄堂・二、五〇〇円) (一色順心)